

トルクメン通信 第3号

2015年11月23日 作成

こんにちは。トルクメン通信第3号です。

こちらに来てから約3か月が過ぎようとしています。当初は、テレビがなくてさみしい、インターネットがなくてさみしい、なんて思っていました、今はそんなにほしいと思わなくなりました。日本にいたころは、家に帰ったらとりあえずテレビという生活だったのに・・・慣れって恐ろしいですね笑。

● 安倍首相のトルクメニスタン訪問と日本語教育拡大

さて、この一カ月の間、大学では大きな出来事がありました。安倍首相のトルクメニスタン来訪です。日本の首相がトルクメニスタンに来訪するのは初ということで、こちらではとても大きく取り上げられていました。私も首相来訪関連でこちらのテレビ局から取材を受けたり、授業を撮影されたりしました。この間はその準備で慌ただしく過ごしていました。

まず、首相夫人との懇談会の準備。首相夫人が日本語学科の生徒とお会いするというので、そのやりとりの準備（「やりとりの準備」っておかしいですね。「やりとり」はその場で行われるもので、準備できるようなものではないので）を2週間くらい前から始めました。最初は「たのしそう！」「早く話してみたい！」と余裕(?)な様子を見せていた学生も、首相夫人との懇談会が近づくにつれ徐々に緊張するように。「首相夫人の質問に答えられなかったらどうしよう」「失礼なことをしないようにしないと」「先生、首相夫人ってどんな人ですか？怖い人ですか？（俺も会ったことないからわかんないけど・・・）」とソワソワし始めました。私もあまり緊張しなかった、いや、首相夫人が会場に入場された時はさすがに大丈夫かと不安になりましたが、基本的に彼らだったら大丈夫だろうと思っていました。なぜか本番になると見えない力を発揮するトルクメンの学生なので笑。ただ、「大丈夫、大丈夫。先生はみなさんのことを信じています。」なんて言うと突き上がってしまうので、「大丈夫ですか？先生はとっても心配しています（泣）・・・」「日本語間違えたら日本とトルクメニスタンの関係が悪くなりますからね！」なんて言ってみたり、わざとちょっとバタバタしてみたりしながら、学生を脅かして反応を楽しんだりしていました笑。当日、「頭が痛い」と言って本当に具合悪そうにしている学生を見たときは、少しやりすぎちゃったかなーと思いましたが・・・。みんなごめんね！

でも、本当によく頑張ったと思います。特に5年生は最終学年らしく、予想していなかった質問が出たときも臆さず答えていました。ほかの学年の学生も、練習した日本語を一生懸命伝えようとしていました。首相夫人の「みなさん日本語がお上手ですね」という言葉には、当日一言も話していない学生までも喜んでいました。懇談会后、授業で感想を聞いてみると、「白のスーツがきれいだった（首相夫人は当日、白いスーツを着てらっしゃいました）。」「握手した時、わたしに微笑みかけてくれてうれしかった。」「話し方がきれいで、あんなふうに話したいと思った。」「緊張したけど、ちゃんと日本語を言えてよかった。」などと、彼らにとってよい経験になったようです。練習する中で学生がなぜどんな思いで日本語を勉強しているのか、どんなことに興味を持っているのか、どうなりたいと思っているのかなどといった学生の「思い」を知ることができ、私にとっても良い経験でした。

その他、大学に送られてくるトルクメン語のプログラムを学生と一緒に訳したり、「日本語—トルクメン語辞書」の校正を2日で終わらせたり、ある女性歌手の歌のタイトルをトルクメン語に訳すお手伝いをしたり（このタイトルは何のために使われたんだろうと今でも不思議です）、懇談会で司会をされるトルクメン人の先生の練習に付き合ったりと、来訪一週間前は休む暇がありませんでした。

さあさあ、大きなイベントが終わったからいつもの生活に・・・なんて思っていました、そうさせてくれないのが、ここ、トルクメニスタン。前号でも少し触れましたが、来年度から中等教育機関、または他の大学

で日本語教育が開始されます。今回の首相来訪が一つの大きな契機となり、様々な動きが見られるようになりました。ただ、すべてが突然すぎるんです。大学でも日本語教師が足りないのにすべての中等教育機関で日本語教育を開始する、国際系の大学では2016年2月から日本語教育を開始する、など、「おいおい大丈夫か？」という話がバンバンと出てくるように。さすがに無謀な計画であるということがわかったのか、徐々に現実的な計画になっていきましたが……。このアザディ名称世界言語大学が国内唯一の日本語教育機関なので、それらの日本語教育環境を整備するのは必然的に当校の日本語教員、ということになります。フルで動ける日本語教員が私を含め3人になったものの、この突然の動きに戦々恐々としていました。ついに「11月23日までに5年生から12年生全学年のカリキュラムと、年内に5年生の教科書つくってね！よろしく！（本当にこんな感じのテンションです笑）」と教育省から通達が……。先週一週間はカリキュラム作りに追われ大変でした。教科書を作り終えるまではバタバタしそうです。

● 「日本語を勉強したくなかったら、しなくてもいいです」

学生と私との関係も徐々に変化が見られるようになってきました。私が教壇に立った当初は、どこか緊張し、私の様子をうかがっていた学生。私との関係が築かれるようになってくるにつれ、徐々に「化けの皮(?)」がはがれてくるように。平気で忘れ物をしたり、自分勝手な行動をしたり、携帯電話を使い始めたりと、あまりよろしくない授業態度が見られるようになってきました。私は、これまで「あえて」そのような授業態度を見逃してきました。いきなり怖い先生だと学生も委縮してしまうので、関係ができるまで「優しい先生、でもたまにちょっと怖い先生」を演じていました。でも、みなさんのしてきたことは、ちゃんとノート（というかパソコンですが）に記録していますのでご心配なく。

ということで、「今だ！」というときに、「これでもか！」というくらい厳しく注意します。ただ、こちらの学生は学長やら学部長やらにいつも怒鳴られているので、言ってみれば「叱られ慣れて」います。僕も怒鳴らないことがないわけではありませんが、こちらの先生と同じ方法で叱っても彼らに届きません（体が小さいので怒鳴ってもあまり迫力がありませんし、怒鳴ると疲れるので…。費用対効果がないってやつです）。それで、その時に重宝するのがこの記録。「〇〇くんはいつも××していますね、これってしていいことなんですか」「〇〇さんは▲日に**していますがこれってどうなんだろう」と冷静に、でもネチネチと学生を追い込んでいきます（この手法は就職した会社で覚えました笑）。自分の悪事（というほど大げさなものではありませんが）を目の前で具体的にしかも冷たい言葉でさらけだされるので、学生は何も言えません。時には男子でも泣き出してしまっている学生がいます。

そして、最後に放つ言葉が「日本語勉強したくなかったら、しなくてもいいですよ。ちゃんと成績もあげます（トルクメニスタンの多くの大学では落第は「事実上」ありません）。でも、私は日本語を勉強したい学生だけに教えたいですから、勉強したくない学生はいりません。じゃまです。教室から出ていってください。」というもの。僕は本気でそう思っています。特にトルクメニスタンで日本語ができなくても困りません。ですが、そのような状況を知りつつも、一生懸命日本語を学んでいる学生がいます。様々な理由で日本行きが叶わずつらい思いをしていますが、それでも日本語を勉強し続けている学生がいます。僕はそのような学生を第一に考えたいと思っています。そのような学生のために僕の力を使いたいと思います。日本語ができなくても、上手じゃなくても、全く構いません。ただ、自分なりのやり方で、自分の学びを得ようとしている学生に僕は全力で応えたいと思います。時には夜中まで授業準備をすることがあり、睡眠時間が数時間という日がありますが、別に苦になりません。端から「日本語ができない」「むずかしいからやりたくない」「好きなことだけをする」「目の前の課題から逃げている」ような学生のために使う力はありません。もちろん、つまらなそうにしていた学生がいた場合、「なぜ今日は〇〇くんはこんなことしてたんだろう」と自分の実践を反省します。やる気が出てくる授業、「日本語が面白い、楽しい」と感じる授業を行うための工夫もしています。すべて「やる気のない学生が悪い」とは思いません。ですが、教師は学生の操り人形ではありません。学生をよろこばせるためのロボットでもありません。

学生のニーズをすべて満たすための言いなりでもありません。学生と同じように、僕もやりたいことがあって教壇に立っていますし、学生と同じように学んでいます。授業は学生と先生が一緒につくるもの。学生だけが頑張る、教師だけが頑張る、そういう一方的な関係だけで成り立つものではないと僕は考えています。学生も先生も「どうすれば学びを生むことができるか」を本気で考えぶつかっていく、一人ひとりが「授業の主体」となって関わり合っていく、「教室」とはそういう空間であるべきだと思いますし、そのために僕は努力をしています。「学生は俺／私のいうことだけ聞いていればいいんだ」という教師はもちろん、「自分はお客様、自分の心を満たしてくれる授業じゃないと受けない」と、最初からそのような努力をあきらめている学生に授業を受ける資格なんてないと思いますし、様々な学びが交錯する空間にいてほしいと思いません。学生にその「あきらめ」が見えたとき、僕は学生に厳しく接するようにしています。ただ、これはトルクメニスタンだからできること。日本では違ったやり方を考えないといけないなと思います。

学生に僕の思いが届いたのか、はたまた、もうこんな風にネチネチと追いつめられるのはこりごりだと思ったのか(前者だと信じたいです笑)、叱った学生のすべてが期待以上のふるまいをするのも事実。こちらの学生はとても素直ですので、「自分が悪い」と思ったことは正直に認め反省しますし、それなりの振る舞いをしてくれます。学生と僕の関係も新しい段階に入ってきたのかもしれないと思うこの頃です。

気づけば文字のみ、しかもなんか熱くなってしまった今号。少し暑苦しくなっていましたでしたが、寒さが近づきつつある北半球のみなさまにとってはちょうどいいのではないのでしょうか(笑)。南半球／赤道付近でこの「トルクメン通信」をご覧になっている方がいらっしゃいましたら申し訳ございません……。次号以降はもう少し落ち着いた話題をお伝えできるようにします。また、こちらの先生方、(元)学習者に対するインタビューも順調に進んでいます。今、文字起こしをしているところですので、終わり次第ここでもご紹介していこうと思います。ではでは今回はこの辺で。Sag Boluň!

アザディ名称世界言語大学 上原龍彦

(ご質問・ご感想などは azadyuehara★gmail.com へ。★を@に変えてください)